

一乗寺本堂の修理が完成

「法華山一乗寺本堂」の改修が終わり、4月1日から一般拝観が始まりました。寛永5年(1628)再建当初の姿に戻った本堂を、ぜひ訪れてみてください。



法華山一乗寺の歴史と修理の概要

▲改修が終わった一乗寺本堂。

昔、天竺(現在のインド)から飛来した法道仙人が法華山で修行を重ねていた折、その高名を聞き孝徳天皇の病氣治癒に招いたことが縁となり、白雉元年(650)に大殿を建立したことが一乗寺の開基と伝わります。国宝三重塔が建てられた承安元年(1171)頃までには現在のような寺観が整っていたと考えられます。しかし、境内の堂宇は、その後何度か火災にあい本堂をはじめ諸堂は荒廃します。

本堂は、約380年前の寛永5年に姫路藩主本多忠政公の支援を受け、正面約23m、奥行き約20m、高さ約17.5mもの大規模な建物として再建しますが、文献など確実な記録では4代目の本堂となります。当時建築材料は、遠く九州や四国から調達され、牛や馬を使い山中に運びこみ、翌年には上棟を終えたとありますが、本堂使用材のほ

とんどが松材で、ほんの少量の桧や杉材が交ざります。この背景には、永く続いた戦国時代の騒乱もようやく落ち着きつつあるものの、近辺では大量の建築材を調達するまでに当地の自然環境が回復していなかったことも要因であったかもしれません。

平成10年秋、近畿地方に大きな被害をもたらした台風が通過した際、本堂は大きく被害を受けました。

平成12年から始まった保存修理工事は、8ヵ年、約10億4千万円の経費をかけ半解体修理という方法で、建物全てを解体せずに傷んだ部分を解体し修理しました。つまり、本尊を安置する宮殿・須弥壇と本堂内部の一部の柱を残し、その他を全て解体し修理を行なっています。解体した建築部材は、内部改修の変遷と当初の姿を復元する根拠を収集した上、損傷・腐朽した用材は繕うなど可能な限り古材の再利用を行なっています。

なお、本堂は、尾根斜面を削り建てていることもあり、建物基礎は切り土と盛り土の上に建っていますが、大きな地震が起きた時には盛り土の部分が崩れる危険性がありました。その為、本堂の木部に影響を与えない方法で、床下の見えない場所にコンクリートと鉄骨を使い耐震補強を行ない、また瓦などに工夫を講じることで屋根重量を減らし、建物周辺の危険樹木も撤去するなど災害対策にも万全を期しています。



● ホームページ <http://www.city.kasai.hyogo.jp>
■ 広報がさいは、資源保護のため再生紙を使用しています。



大豆インキを使用しています。

発行／加西市
〒675-2395 加西市北条町横尾1000番地 ☎0790④1110(代)
編集／加西市 経営戦略室 ☎0790④8700 FAX0790④1800